

錦織監督

映画の現場から



●○○46

島根は最先端の地

「古代に行った男ありけり」(関和彦著)をやっと読むことができた。最近、島根に関連した著作を読みあさっている。この「古代に行った男」で、あらためて古代から伝わる遺跡や言葉の奥底にある息吹を感じ、多くのことに気付かされる。昨年は古事記1300年の節目の年であったが、混沌とした時代だからこそ、一過性ではない歴史観を私たち現代人が持ち、「クニ」を考え生きていかなければと思う。

関先生が監修した四十二浦巡り再発見研究会の「七浦巡りの旅〜平田〜」も併せて興味深く読んだ。足元にこんなにもロマンあふれ、歴史のある遺跡や風景、風土、慣習、祭りが残っていることを誇りに思うが、以前より島根という土地(場所)は地理的にも、歴史的にもグローバルなところと感じている。大陸側から見たらまさに玄関口。隠

歴史に学び映画作りたい

岐の島はその最先端であり、海運によってすべてが移動していたころ(つい最近まで…)、海流や地理的要素からも島根と異国との交流が盛んだったことは当然と言えば当然の話。現代の島根は産業という物差しでは随分遅れたところという印象になり、メディアもそういった視点で評価するので、住んでいる人や出身の私までもそういう錯覚に陥りがちだ。

しかしながら、しまね3部作と「渾身」をご覧になった東京をはじめ全国の方々のほとんどが「豊かな

ところ」という感想を異口同音に寄せてくれた。この感覚の落差は一体何たるう、というのがここ10年の島根での映画作りの私の原点であり、原動力である。

実際の島根の環境は世界的にも優れていると思う。健康や長寿、安全はお金で買えない。きれいな水や空気がタダではない。人類は世界的にこの普遍的な問題に直面している。中国の大

気汚染が問題視されているが日本も通ってきた道である。日本の何倍も人口のある中国が経済的に豊かにな

ったらどうなるか、想像はできると思う。

でもそうやってみないと分からないのが人間社会。江戸時代は遅れていた、という概念は現代において見直されつつある。近代化を進めたかった新政府にとって、過去を否定する必要もあつたろうが、江戸時代は世界有数の進んだクニだった日本。今こそ昔ながらの風土や風景が残ることこそ最先端だと胸を張っていいと思う。

料理人であり一部上場企業の経営者の「おいしい物は見た目でわかる」という言葉にハッとされた。風景が乱れているところは、コミュニティや安全、環境が崩れている。山が荒れ、田んぼが荒れば、都会もただでは済まない。美しい風景が残っていることこそ未来への可能性を示している。歴史に学び、想像力を持たないと知識だけでは乗り切れない時代だ。歴史を振り返りたくなくなり、観客の興味と想像をかき立てられる映画を作っていきたいと思う。

(錦織良成・映画監督)

第2、4金曜掲載



映画「渾身」より 豊穣(ほうじょう)の海からの恵み